

# 抄訳「ラフマニノフの思い出」(マリエッタ・シャギニャン)

平野 恵美子

## 1. 『ラフマニノフの思い出』について

セルゲイ・ラフマニノフ (Сергей Рахманинов, 1873-1943) は、おそらくチャイコフスキーに次いで、最もよく知られ、人気のあるロシアの作曲家ではないだろうか。フィギュア・スケートの五輪や世界選手権のメダリスト・クラスでは、必ずと言っていいほど、ラフマニノフの曲が使用される。また歌詞の無い歌曲「ヴォカリーズ」や、ピアノ協奏曲第2番などは、フィギュア・スケート以外でも、映画やドラマ等でよく使われ、そのドラマチックで哀愁に満ちた美しいメロディーと高度な技巧は音楽愛好家の心を掴み、演奏会でも好まれる人気の高い作品である。生前から熱狂的なファンが大勢いた一方で、このわかり易く感情を盛り上げる旋律が、バロックのように素朴で硬派な古典音楽、難解で知的な現代音楽を好む愛好家や批評家には軽視されてきた嫌いがある。<sup>1</sup> だが、ラフマニノフの曲がどれほど甘美で大衆受けする音楽だとしても、決して軽薄な一時の流行に墮することなく、人々に愛され続けているのは、人の心の琴線に触れる真摯な何かが作品の根底に常にあり、それはとりもなおさず作曲家を直接知っていた友人達が述懐する、ラフマニノフの真面目で誠実な人柄そのものの反映であるように思えてならない。

『ラフマニノフの思い出 (Воспоминания о Рахманинове)』は、アペチャン (З. А. Апетян) が編纂した二巻本として、ソヴィエト国立音楽出版所から、1957年に最初に世に出た。ラフマニノフと直に親交があった人々による、作曲家についての回想録を集めたこの書物は、その後、版を重ねると共に、新たな回想も追加された。ラフマニノフと並び称される作曲家のメトネル (Николай Метнер)、著名なピアニストのゴリデンヴェイゼル (Александр Гольденвейзер)、「ヴォカリーズ」を献呈されたソプラノ歌手のネジダノワ (Антонина Нежданова)、作家のブーニン (Иван Бунин) らの他、有名なオペラ歌手のシャリヤーピン (Фёдор Шаляпин) や作曲家のコニユス (Юлий Колюс) らラフマニノフと親しかった芸術家の家族達が、不世出の作曲家の思い出を語っている。初版から収められている、ソフィヤ・サーチナ (София Сатина) の「ラフマニノフについての覚え書き (Записка о С. В. Рахманинове)」は、ラフマニノフ家の起源にまで遡って調べ上げ、作曲家の全生涯を記したもので、今日のラフマニノフの伝記の多くはこの労作に負うところが大きい。サーチナはラフマニノフの妻ナタリヤ (Наталья) の姉妹で、作曲家の従妹であり、生涯の大部分をラフマニノフ夫妻と共に過ごした。また彼女は、ロシアにおける女子教育発展の功労者であり先駆者で、大変知的な

人物だった。

この回想録の中では、個人的なエピソードと共に、誰もがラフマニノフの几帳面さ、真面目さ、練習熱心、自分に対する妥協を許さない態度について、また非常に気前が良く寛大で、ユーモアと笑いを好む性格だったことを述べている。中には記憶違いや、こうあってほしいという願いが事実を書き換えてしまった可能性があることも否めない。そのことは本稿の中心であるシャギニャンの回想についても言える。だがどの回想も、作曲家に対する尊敬の念と愛情に満ちており、作曲家自身や当時の事象に関する資料的価値が高いという以上に、読んでいて心が温かくなり、ラフマニノフの音楽を愛する者が、作曲家に抱く理想を決して裏切ることがない。だからと言って、聖人君子よろしく神格化しているわけではなく、むしろその人間的なエピソードこそ、読者が読みたいと思っているものに近いだろう。

いずれも捨て難い貴重な記述ばかりだが、中でもシャギニャン (Мариятта Шагинян, 1888-1982) の「ラフマニノフの思い出 (Воспоминания о Рахманинове)」は注目に値する。シャギニャンはアルメニア系の詩人、作家、哲学者であり、16歳の時に最初の処女詩集を出版するほど早熟で聡明だった。メシコフスキーやギッピウスらの知識人達とも、若い頃から交流があった。最初は匿名のファンレターに始まって、ラフマニノフと文通し、やがて実際に会うようになる。映画『ラフマニノフ ある愛の調べ (Ветка сирени)』(2007)に登場する魅惑的な女学生マリアンナのモデルと考えられるが、この映画の描写をもし本人達が見たら、怒り狂うのではないだろうか。また、回想に書かれているように、シャギニャンは、メトネル一家と親しく付き合い、彼らの家に長期間、滞在した。彼女の言に従えば、メトネルとラフマニノフを引き合わせた。1912年、雑誌『労働と日々 (Труды и дни)』にラフマニノフ論を掲載したが、ラフマニノフはこれについて「結論から言うと、君は正しくないように思えた」と書いている。<sup>2</sup> シャギニャンは社会主義政権を支持し、その活動と作品により、レーニン勲章を始め、数々の賞を受けた。回想中にも、ロシア革命を必要以上に賞讃するような記述が散見されるが、革命後の困難な時期に脚光を浴び、評価された作家としては、当然のことだろうし、そうしなければ生き延びることが出来なかったのかもしれない。

この回想は1955年に書かれ、『労働と日々』に論文が掲載された時から、40年以上が過ぎており、シャギニャンはまもなく70歳に差し掛かろうとしていた。また、ラフマニノフが世を去ってから既に10年以上が経過しており、もし作曲家が実際に手に取って読む機会があれば、訂正を加えたいと思う箇所もあるかもしれない。だが、シャギニャンとラフマニノフが特別な信頼関係で結ばれていたのは間違いない。ラフマニノフを見つめるシャギニャンの視線は、時に若者らしく熱くストレートで、また時に経験豊かな母親のように優しく包み込む。15歳以上も年が離れていたにもかかわらず、引用された手紙から、ラフマニノフがシャギニャンを完全に信頼し、心を開いていたのがわかる。シャギニャンの文体は、とりわけ難解な持論を述べるところでは、回りくどく抽象的で分かり辛いのが、ラフマニノフが人間的な弱さを曝け出している場面の描写は心に迫るものがある。この回想の一番の魅力は、先に述べたように、ラフマニノフと直接交流のあった人達にしか知り得ない、その人間的な横顔である。2人でモ

スクワ郊外のメトネル家を訪れるくだりは、とりわけ心を打たれる。冬のロシアの田舎の情景が抒情的に描かれ、その寂しい道程は、作曲家の心の不安を表していた。この時、ラフマニノフは、久々の大作である合唱交響曲『鐘』の初演を目前に控えていたのである。本稿ではこうした、出来事を時系列に記しただけの伝記では読むことのできない、シャギニャンが見たラフマニノフの内面を、その回想の一部から抄訳として紹介したい。

## 2. 作曲家の生涯とシャギニャンによる回想

シャギニャンの回想を紹介するにあたり、それがラフマニノフの人生のいつの時のことなのか理解しやすいように、以下、作曲家の略歴も平行して記す。ラフマニノフの伝記で通常、シャギニャンがあまり大きく扱われることはないし、シャギニャンの側から見ても同じである。ここで紹介するのは2人の傑出した人物が、互いの人生が交差する刹那にお互いをどのように見ていたかという、一般的な伝記では描かれぬ作曲家の私的な一面である。無論、1人の回想だけで、ラフマニノフがどんな人物だったかを規定し、標準化するつもりは毛頭ない。この抄訳は、1912-17年という短期間ではあるが、シャギニャンの目で見えたラフマニノフの人生の断片を綴ったものである。

サーチナの調査によると、ラフマニノフ家の家系は15世紀にまで遡ることができる。作曲家セルゲイ・ラフマニノフの高祖父ゲラシム・エヴレイヴィチの時、タンボフ県に土地を下賜され、そこに隣接するズナメンスコエの土地を買って住んだ。ゲラシムの息子のアレクサンドルの妻であるマリヤは、音楽の素養があり、ピアノが上手だったという。マリヤとアレクサンドルの息子のアルカーギー、つまりセルゲイの祖父もまたピアノの演奏に秀で、アイルランド人作曲家兼ピアニストで、ロシア音楽の発展に大きく貢献したジョン・フィールドに弟子入りした。アルカーギーの息子のワシーリーがセルゲイの父であるが、女性にもてて、奔放で、このワシーリーの代に破産し、領地を失ってしまう。一家はペテルブルクに移り住むが、疫病で子供達を次々に失うという不幸にも見舞われ、結局、夫婦は離婚してしまう。

セルゲイにピアノの手ほどきをしたのは、母親のリュボーフィで、次は音楽教師のアンナ・オルナツカヤだった。母方の祖母のソフィヤは孫を大変可愛がり、セルゲイはよくこの祖母とノヴゴロドで楽しい少年時代を過ごした。

ピアノの才能を認められ、セルゲイはペテルブルク音楽院に入学するが、学業に身が入らなかった。この頃はスケート靴を隠し持って、授業をサボり、スケートに熱中していたという逸話がある。そこで従兄であり、著名なピアニストのジロティ(Александр Зилоти)の勧めで、モスクワに移る。ジロティやゴリデンヴェイゼルもその下で学んだ有能な音楽教師、ニコライ・ズヴェーレフの家に住み、厳しい訓練を受けて、ようやく才能が開花し始める。チャイコフスキーの前で演奏したこともあった。今日、ラフマニノフは、作曲家として記憶されることが多いが、生前は、作曲家、ピアニスト、指揮者の三つの顔があり、非常に人気の高かったピアノの演奏は現在も録音で聞くことができる。シャギニャンによる、「ラフマニノフについては、

1910年代にはしばしば次のように言われるのを耳にした。『彼は天才的な演奏家だけど、作曲家としては折衷主義者だ』という記述は、今では驚きを持って読む人の方が多いだろう。<sup>3</sup>

モスクワ音楽院でラフマニノフは、ピアノをジロティに、対位法をタネーエフに、作曲をアレンスキーに学んだ。音楽院の卒業前に師のズヴェーレフと決別し、父方の親類のサーチン家に移り住む。その家にいたのがソフィヤと、後に妻となるナタリヤである(1902年結婚)。ラフマニノフが休暇を過ごしたイワノフカは、サーチン家の所領である。1891年にピアノ科を、1892年に作曲科を、どちらも金メダルを受賞して卒業する。ピアノ科の同期で、次点で小金メダルを受けたのはスクリャービンだった。作曲科の卒業制作はオペラ《アレコ》である。ラフマニノフのオペラは今日あまり上演されないが、他に《吝嗇の騎士》(1906)、《フランチェスカ・ダ・リミニ》(1906)等がある。《アレコ》は音楽院卒業の翌1893年、早くもボリショイ劇場で上演される。

だが1897年3月、有名な交響曲第1番初演(グラズノフ指揮)の大失敗という事件が起きる。この失敗の真相は謎に包まれており、グラズノフの醜聞説からラフマニノフ潰しの陰謀説まで様々である。サーチナは、「もしももっとよい演奏がされ、別の場所、たとえば、ラフマニノフの名声がある程度知れわたり、いつも熱狂的な歓迎を受けていたモスクワなら、この交響曲はもっと違った風に受け入れられていたかもしれない。」と述べている。<sup>4</sup>当時のペテルブルクでは、ラフマニノフはまだモスクワほど認められていなかったのだ。

なお、シャギニャンは作品そのものの出来が良く無かったと考えていたが、彼女の記述によれば、ラフマニノフはそうは考えていなかったようである。

当時は、この曲について語る事ができたのは、私の友達の父親のような「老人達」だけだっただろうし(たった一回だけ行なわれた演奏の時、私自身はわずか9歳だった)、彼らの中には、初演を聴いた者もいたが、あの失敗がグラズノフのまづい指揮によるものだと説明するのを聞いたことは一度としてなかったのを覚えている。しかも、基本的にラフマニノフに好意的なある人の逆の意見が思い出される。彼はこんな風に言った。

「ラフマニノフが自分で指揮をしなくてまだよかった。もし彼が自身で指揮棒を振ったら、失敗による精神的な打撃はずっと大きかったかもしれない。」

半世紀後に、私が初めてこの交響曲を聴いた時、クルト・ザンデルリングのような素晴らしい指揮者による演奏でも、完全に感動することはできなかった。良く出来た挿入部の連続にもかかわらず、曲は部分部分にまとまりを欠き、退屈で説得力が無かった。<sup>5</sup>

彼は、この作品が形になっていないという私の意見を一生懸命否定しようとした。私がいつも彼に書いていることは全てもうこの作品の中にあるが、誰もそれに気がつかなかったのだ、ときっぱり言った。彼は木に例えて、次のように話した。

もし指で若い芽を摘んでしまったら、それは成長することができない。そして彼もまた、自分の若い芽を伸ばそうとしたまさにその始まりの時に、「摘まれてしまった」のだと…。<sup>6</sup>

この一件でラフマニノフが精神的な打撃を受けたのは間違いない。催眠療法医ダーリの治療を受けていた、という有名な逸話は事実だが（ピアノ協奏曲第2番はダーリに献呈された）、それはもう少し後の1900年頃の話である。

心の傷はその後も長い間癒えなかったかもしれないが、1897-1898年の劇場シーズンに、ラフマニノフはサツヴァ・マーモントフの私立オペラ団に指揮者として招かれ、音楽家として活動している。彼はここでシャリヤーピンと知り合い、2人は生涯の大親友になった。

1904-1906年はボリショイ劇場の指揮者を務め、1907年にはディアギレフ（Сергей Дягилев）がパリで催した芸術祭「ロシア・シーズン」に参加する。ディアギレフは、1909年からのバレエ公演、いわゆる「バレエ・リュス」を率いて一世を風靡した。

シャギニヤンの回想によれば、交響曲第1番の失敗から15年後の1912年2月、ペテルブルクのマリンスキー劇場でラフマニノフが《スペードの女王》を指揮すると知り、多感な彼女は、あの時の失敗が尊敬する音楽家に影響を及ぼさないかと案じて、「Re」というペンネームでラフマニノフに匿名の手紙を書いた。ラフマニノフは「Re」に返事を書き、文通が始まった。そして同1912年の暮れまでに、2人は直接の知り合いになっていた。ラフマニノフは歌曲のテキストのアドバイスを博識なシャギニヤンに求め、14の歌曲から成る『ムーサ』を返礼に献呈している。1913年には、ラフマニノフとメトネルの親交も始まった。しかし同じ年の暮れに『鐘』（ポーの詩の、バリモントによる翻訳にもとづく）が初演された時、シャギニヤンと違い、メトネルはこの作品にあまり感銘を受けなかったようである。

『鐘』の初演の少し前、メトネルはラフマニノフとシャギニヤンを、田舎の領地に招待した。メトネルは、ニコライ、ニコライの妻のアンナ、ニコライの兄弟のエミーリィの3人で暮らしていた。以下は先述したシャギニヤンの筆による、その時の2人の道程である。

1913年12月の終わり、メトネル達はラフマニノフを、田舎の屋敷に招いたので、私達は一緒に行くことにした。メトネル一家は、既に述べた通り、サヴェロフスカ鉄道沿いの、2-3年の間借りていたトラハニェヴォの領地（私の記憶違いでなければ）に住んでいた。そこでの生活は、良い面と不便な面があった。モスクワとその音楽生活から離れて、食料品を求めて町へ出向き、お客を招く時は必ず宿泊を伴い、また彼らのために交通手段も用意しなければならなかった。これらは全て不便な面である。当時、モスクワ郊外にはまだ、電話も電気も無かった。フレーヴニコヴォ駅からトラハニェヴォまでは、足元の悪い道が数露里続き、往来には冬は粗末な農民の荷籠、夏は荷馬車が頼りだった。一方、良い面といえば、こうした

不便さを全部差し引いても、おつりが来るほどだった。素晴らしい空気、丘の上の森と雪割草、大きな田舎の地主の家、その部屋数は多く、明るい大きな窓がついており、そこから濃い緑の松と若いビロードのような樅の木が見えた。音楽を聴くための妨げはなく、そして、重要なことは、時間である。「時間」は、と太字で書くが、ゆっくりと、そして川の増水のようにたっぷりと、朝とても早くから田舎の就寝時間である9時か10時頃まで、各人のために豊富にある。誰もどこにも急いでいなければ、誰も急かしたりもしないで、時間の貯えがある、つまり、もしうまく行かなくてもやり直すことができるし、好きなだけ訂正し、間に合わないかもしれないと心配しなくてもよくて、そのための余剰の時間がたっぷりあると感じながら仕事をするのは素晴らしかった。こういったこと全てを叙情たっぷりに、私は道中、ラフマニノフに語ったのだった。

私達は前もって取り決めてあった通り、駅の切符売り場で落ち合った。それから汚くて薄暗い「近郊」列車に乗り込んだ。車両はレールの上で軋むような音がして、フレーヴニコヴォに着くまでの間、それぞれの駅で長い時間、停車した。そこは、別荘滞在者がもういない空っぽの、典型的な冬の情景で、ただ、馬の歯の噛み跡がついた木製の遮断機のところに、干し草を積んだ荷馬車が2-3台停まっていた。堆肥とサモワールの湯気の匂いが漂い、空はうっすらと明るくなり始めていた。私達は人気のないプラットフォームに降り立った。ラフマニノフは、その先の道程に出発する前に、ベンチに腰掛け、列車の中でほどいてしまった防寒帽の紐を結んでくれるよう、私に愛想良く頼んで言った。

「暖かければ、見た目は気にしないでいいんだよ。」

私は母親のように彼の帽子の紐を結んでから、迎えの人夫を探しに行った。櫓は車体の低い農民用のものらしく、座席に麻袋に入れた干し草が打ち付けてあった。寒気が烈しかった。馬が尻尾を勢いよく振って、私達の櫓は動き出した。私がラフマニノフと会っている時に、彼がこれほど不安そうであるべない様子に見えたことがあったかどうか、他に思い出せない。彼は、知らない家へ行くこの長時間の道行きを、子供のように怯えていて、正直にそれを私に話した。ラフマニノフは、私がトラハニェヴォの生活を称賛するのを聞いて、こう答えた。

「君は町の間人だが、私自身は田舎の間人なんだよ。町は耐えられない。冬の間は町に住むしかないが、ほら、『ヒバリ』がモスクワのパン屋に飛んで来るたびに、いつだって田舎へ戻って行くだろう!」

モスクワでは、3月9日に「ヒバリ」というパンを売る習慣があった。それは目の代わりに干しぶどうが入った味付きの、小鳥の形をした捻りパンだった。そして彼は実際、3月になるともう、イワノフカの自分の領地に行ってしまうのだった。どんな風に領地を治めているか、どんな風にやりくりしているか、何をどれだけ撒き収穫するか、冬の間、屋敷に誰が残り、管理するか、トランボフ県の農民はどん

な者達か、隣人は誰かということ、彼は移動中、私に少しずつ語ってくれた。ほとんどいつも黙っているのに、この時の彼はほぼずっと一人で話していた。それなので、私達が目的地に近づいて、彼が突然黙り込んでしまったら、残念に思えたほどだった。だが敷物を投げ下し、私が降りるのを手伝ってくれる際に、彼はこう言った。

「1月には『鐘』の公開総稽古がある。君を2列目に招待するよ。」

つまりここに着くまでの間ずっと、彼はあれほど屈託ない様子で田舎の話をしてきたのに、『鐘』についての考えはずっと頭を離れなかったのだ。<sup>7</sup>

『鐘』は成功を収めた。シャギニャンは、『鐘』はオランダ人指揮者のウィレム・メンゲルベルクに献呈されたが、メンゲルベルクが当時、『鐘』を評価していなかったメトネルといざこざがあったので、ちょっとした噂になったことなど、興味深いエピソードを記している。

1915年、モスクワ音楽院で金メダルを競ったスクリャービン、そしてタネーエフらが次々と世を去る。ラフマニノフはスクリャービンの追悼公演を行なった。この演奏は手厳しい批評もあったようだが、その真意を問い正したシャギニャンに、ラフマニノフは次のように説明したという。

「スクリャービンはどうしたって本物の音楽家なのだよ、可愛いRe。だが残念なことに、彼自身、生きていた間はしばしばそのことを忘れてしまったし、他の人達も忘れていた。そして今では、何やら無意味なもの、スクリャービンの曲の演奏のわかりにくい流派が作られようとしており、彼がこの世に持って生まれたもの、つまり彼生来の音楽性が、完全に葬り去られようとしている。私にはそれが聴こえるし、いつも彼の曲の中にこれを聴こうとしている。そしてただ、一人の亡くなった音楽家に対する、もう一人のまだ生きている音楽家の義務は、作曲者が自分の音楽をどのように聴いていたか、聴衆に伝えることなのだ。だから私はロシア中で演奏して、これを伝えるつもりだ。」<sup>8</sup>

ラフマニノフによるスクリャービン追悼演奏会は、シャギニャンが当時、住んでいたナヒチェヴァンに近い、ロストフ・ナ・ダヌーでも行なわれた。親しい友人達の死が引き金になったのか、ラフマニノフは死をととも恐れており、シャギニャンの家を訪れ、次のように打ち明けたと言う。

それは普通とはまるで違う話だった。ラフマニノフは夕食にほとんど手をつけようとせず、その後、古い肘掛け椅子にいつもの癖で背を丸めて座り、とても心配そうにぐずぐずした感じで私に尋ねた。

「君は、死についてどう思っているの、可愛いRe？ 君は死が恐ろしいかい？」[…]

「かつては、何でも少しずつ怖かったんだ、強盗、盗人、伝染病・・・だが少なくともこうしたものは、対処することができた。だがとりわけ、死後も何かがあるのかどうか、そのところがどうもはっきりしない、それが恐ろしいんだ。腐敗し、消滅し、存在するのをやめるならいい、だが、死んでからももしまだ何かがあるとしたら、それが恐ろしいんだ。それが不確かでわからないことが恐ろしいんだよ!」

「でもキリスト教は二千年も、死後の生や個人の命の不滅を説いて、人々に安堵を与えて来たのに」と私は答えた。

「人々が二千年も安堵を得て来たのに、今、まさにこのことを恐れるなんて、何ておかしいこと。」

「思うに、全く安堵なんかさせられてなかったんだよ。」とラフマニノフは言った。

「それどころか、地獄やら煉獄やらで頭が朦朧とするまで脅かしたんだ。僕は個人的には不滅など欲したことは一度もない。人間というものは老いさらばえ、年を取り、老齢になると自分自身にうんざりするものなんだ。でも僕は、年を取る前に自分自身にうんざりしてしまっただよ。だがあの世にもし何かあるとしたら、それが恐ろしいんだ。」

彼は突然、真っ青になり、顔に痙攣さえ走った。この時、私の母が台所から、塩をまぶして焼いたピスタチオを持って来て、彼の前に置いた。ラフマニノフはこのピスタチオが大好きだったので、私達はいつも彼のためにたくさん用意したのだった。そして今、彼は自分でも気づかないまま、夢中になって、それから自分の方に皿を引き寄せ、これを見て、突然笑い出した。

「ピスタチオのおかげで、死の恐怖がどこかへ消えてなくなってしまったよ。どこへ行ったか、知らないかい?」<sup>9</sup>

ピスタチオであれほど恐れた死のことを忘れてしまうというのは、何とも微笑ましい。シャギニャンは、ラフマニノフを駅で見送る際、「死の恐怖に対する治療薬」として塩炒りピスタチオを渡したという。<sup>10</sup>

シャギニャンの記述によれば、彼女は1915年末にモスクワへ戻って来た。だが2人きりで会うことはもう無かったという。その頃には彼女はもう結婚もしていた。シャギニャンが最後にラフマニノフに会ったのは、1917年7月の終わり、キスロヴォツクだった。革命の進行と共に、芸術家を取り巻く状況は困難になりつつあり、ラフマニノフもそのうちの1人だった。彼は外国へ移住するつもりでいる考えをシャギニャンに話し、彼女は引き留めようとした。<sup>11</sup> だが無駄だった。1917年12月、ラフマニノフ一家はロシアを去る。

国外脱出は、中立国だったスウェーデンのストックホルムでの演奏旅行という形だった。サーチナの回想によれば、出国の際、特に苦勞することはなかった。見送りはなかったが、出発の前にシャリヤーピンが、イクラと白パン、そして心のこもった手紙を届けてくれたので、ラフマニノフはこれに大変感激した。シャリヤーピンとはその後、再会し、生涯親しい友人で



あり続けた。

ラフマニノフはロシア国外でも大きな成功を収め、米国と欧州を行き来した。スイスのルツェルン湖畔に、セナール (SeNaR) という別荘も構えた。これはもちろん、セルゲイ、ナタリヤ、ラフマニノフの頭文字を取ったものである。戦争の影響による不安な情勢や大恐慌もあったが、金銭面では概ね安定していたようである。結果として亡命者となったが、シャリヤーピンやブーニンを始め、外国にいても常にロシア人芸術家達に囲まれ、交流を絶やさなかった。帰国の願いはとうとう叶わなかったが、彼の作品はソ連時代もロシアで演奏され続けた。外国からソ連の兵士達を援助し続けたということもあったが、何よりも、彼の楽曲の素晴らしさが、演奏家達を魅了したからに他ならない。

ラフマニノフは、カリフォルニアのビヴァリーヒルズにも家を購入し、最後は米国で亡くなった。シャリヤーピンの娘のイリーナ・シャリヤーピナは、米国人ピアニストのヴァン・クライバーンがロシアからリラの木を運んで、偉大な作曲家の墓に植えてくれたことにとでも感謝していると記した。リラはラフマニノフの代名詞のような花で、「リラの花」は「ヴォカリーズ」と並んで最も人気の高いラフマニノフの歌曲である。2007年の映画の原題も「リラの枝 (Ветка сирени)」だった。

ラフマニノフの墓はニューヨークのケンシコ墓地にある。あれほど死を恐れていたラフマニノフは、自分の死をどう受け入れたのだろうか。また、死についてのシャギニャンとの問答の答えを見つけたのだろうか。

シャギニャンの回想には他にも、ロシアでシェークスピア生誕 350 周年祝賀行事の際に上演される『リア王』(荒野篇) や、アンデルセンの童話『エデンの園』のバレエ化のために曲を書く予定があったという、実現しなかった計画についての興味深いエピソードが述べられている。だが本稿の最後に紹介したいのは、1912年5月にラフマニノフがシャギニャンに宛てた手紙である。2人が文通を始めてからまだ間もない頃、実際に顔も合わせたことのない若い娘に、既に有名な作曲家で人気ピアニストのラフマニノフが、これほど無防備に自分の気持ちを綴っているのは驚きである。それと同時に、彼の素朴で、人懐こい面がよく現れている。彼の音楽にも通じる、繊細さ、淋しさ、人間らしさが端的に詰まったこの優しい手紙をもって、本稿も筆を置くことにする。

私の子供達、音楽、花々の他に、私は、可愛い Re、君のことも、君の手紙も愛しています。私が君を好きなのは、君が賢く、おもしろくて、極端ではないからです。(これは私が誰かを「気に入る」のに、絶対に必要な条件の一つなのです。)そして君の手紙は、いたるところに、自分への信頼、希望、愛が見られるからです。そこには自分の傷を癒してくれる芳香が漂っています。まだそこには幾分か、気後れと確信が持てずにいるところがありますが、だが君は驚くほどの確に私のことを描写し、私をよく知っていますね。一体どうやって? ただただびっくりさせられるばかりです。今後は、自分自身について話す時、ためらうことなく君の

言葉を引用し、君の手紙から註をつけることにします。君が信頼できる一大権威であることは、疑うべくもありません…。これは真面目な話です！ただ一つだけよくないことがあります。それは本人がいないところで君が描いた肖像画が本物に瓜二つだという確信がないまま、君は、私が持っていないものを私の中に探して、この先もそうなることはないような私を見たいと願っているように思われることです。Reの手紙で言う、私の「犯罪的なほどの精神的謙虚さ」は、残念ながら確かに持ち合わせていますし、同じく私が「俗物にまみれて迎える破滅」は、君と同じように私にも遠からぬ未来にぼんやりと見えるのです。これらは全て真実です！そしてそれは実際、私が自分自身を信じられないことから来ているのです。自分を信じる方法を教えて欲しいのです、可愛いReよ！せめて君が私を信じてくれている半分でもいいから、教えて下さい。もし私が自分を信じていたことがあったとしたら、それは昔、—かなり昔の、若い時のことです。[…]この二十年間というもの、私のほぼ唯一の医者が、催眠学者のダーリと、二人の従妹達（そのうちの一人と十年前に結婚したのですが、彼女達のことをとても愛しているから、二人とも挙げさせて下さい）だったのは、故なきことではありません。これらの人達は、あるいはむしろ医者達と言った方がいいかもしれませんが、私にただ一つのことを教えてくれました。それは元気を出して、自分を信じろ、ということでした。私は、たまにはそうできるようになりました。ですが病は私の中に頑固に留まって、年月とともに、おそらくより一層、悪化したのです。だからもししばらく経った後で、作曲を完全にやめてしまおうと腰を決め、ただ職業ピアニストか、指揮者か、それとも農夫か、もしかしたら運転手になったとしても、怪しむには足りません…。[…]

締めくくりに、話は変わりますが、書きたいことがあります。君の言葉と頼みにはいつも気を配っています。この手紙を「けだるい春の晩」に書いています。「けだるい晩」なのはおそらく、私がこのようなけしからん手紙を書いたからで、君にはなるべく早く忘れてほしいのです。窓は閉まっています。寒いのです、可愛いReよ！ だけどその代わりに、ランプは君の言う通りにして、机の上で灯されています。寒さのおかげで君の好きな、だが私が好きになれないし恐い甲虫は、幸いまだ姿を見せていません。私の部屋の窓に大きな木製の鎧戸をつけて、鉄の門をかけました。おかげで毎晩毎夜、私はとても落ち着くことができました。私にはこういった点でもやはり、犯罪的なまでの、いかにも「臆病で小心」などところがあるのです。何もかも恐いのです。ネズミもクマネズミも甲虫も野牛も泥棒も恐いし、強い風が吹いて、煙突が唸り声を上げる時も、雨粒が窓を打つ時も、暗闇も、色々なものが恐いのです。古い屋根裏も嫌いだし、そこには家の精が棲んでいることにしてもいいくらいです（君はこういったものに興味があるでしょうね）。そうでないと、なぜ昼間でさえ、一人で家にいると恐いのか、わかりません…。「イワノフカ」は昔ながらの領地で、私の妻の所領です。私は、この場所を自分の故郷

だと考えています。ここに23年も住んでいるものですからね。とりわけここは、まだ私がとても若かった昔から、私にとって過ごしやすいところでした。ところでこんなことは、昔の小唄を繰り返し歌って聞かせるようなものです。だから、もうやめておきましょう。これ以上何を君に言ったらいいのでしょうか？何も言わない方がいいでしょうね。おやすみなさい、可愛いReよ！お元気で、そして私の病も癒すよう努めて下さいね…。今度はすぐにというわけにはいきませんが、多分、君にまた手紙を書きます。

C.P.

1912年5月8日13

## 注

1. ラフマニノフの没 11 年後に出たグローヴ音楽辞典第 5 版 (1954) には、「ラフマニノフはピアニストとしては同時代の最も優れた演奏家の 1 人だったが、作曲家として彼の時代に属していたとは全く言い難く、グラズノフやアレンスキーのように熟練ながら平凡な作曲家という意味においてのみ、祖国を代表していた。彼はバラキレフの流派のような国民性もなければ、タネーエフやメトネルのような個性もなかった。技術的には彼は高い才能があったが、厳しい限界もあった。[...] ラフマニノフの作品のいくつかが生前に得ていた大変な人気は長続きしそうになく、音楽家から支持されたことは決してない」と書かれている。(Dictionary of Music and Musicians, 5th ed. ed. by Eric Blom, London: Macmillan, 1954. vol 7. p. 27) (ただし、この記述は近年の同辞典からは消えている。) また、一柳は「ラフマニノフが学者の研究対象として取り上げられにくかったのは、ハリウッド御用達の娯楽作家的な扱いをされていたこと、同時代のストラヴィンスキーやスクリャービンらと比較すると特別な作曲技法を確立しなかったこと、当時の政治や思想との関わりを公表しなかったことなどが、その原因として考えられます。学者は理屈をこねるのが好きなので、理屈と接点を持たない作曲家とはくみしにくいのです」と述べている。(一柳富美子『ラフマニノフ—明らかになる素顔 (ユーラシア・ブックレット No.180)』, 東洋書店, 2012 年, 2 頁。)
2. Воспоминания о Рахманинове. составление, редакция, примечания и предисловие З. Апетян. М: Музыка. 1967. Изд.3. Т.2. С.122
3. Там же. С.109
4. Там же. Т.1. С.30
5. Там же. Т.2. С.112
6. Там же. С.167
7. Там же. С.136-137
8. Там же. С.152-153
9. Там же. С.154-155
10. Там же. С.159
11. Там же. С.171. ただしラフマニノフ一家は、革命以前からしばしば外国に滞在し、ドレスデンにも住んでいた (1906-1909 年)。
12. Там же. С.195
13. Там же. С.116-118